

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390300525		
法人名	有限会社 こどもとケアライフ研究所		
事業所名	グループホーム すずらん		
所在地	熊本県人吉市鬼木町1423-1		
自己評価作成日	令和5年12月28日	評価結果市町村受理日	令和6年3月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和6年1月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「我がままであり、その人らしい人生」を最期まで送れ、ホームでの生活に喜びや楽しみ自分の役割を感じられるように、職員一人一人が目・気・心配りをと努力しております。最期を、当施設でと臨まれ迎えられる方や、ご家族が安心して過ごせる環境と安らげる雰囲気作りを目指しています。食べる事の喜びと、出来る限りの摂取できる形体の検討を随時図り、いつまでも食べれる事を目標に、食事の提供を行っています。各地において、災害等により通常の生活すら送れない状況の方々が多数おられる中、地域との連携が重要である事が再確認でき、コロナ5類移行もなされた中、再構築の機会とも考えられるため、地域支援の認知症介護の拠点としても地域の拠点となって、地域と共存できる施設を目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

採光の良いリビングや吹き出し窓の居室からは、季節の移ろいが眺められ、入居者はゆったりとした雰囲気の中で日常を過ごされている。開設時からホーム職員による手作りの食事が継続され、工夫された日々の料理からも季節を味わうことが出来ている。職員は一人ひとりのその人らしさを支援できる様、チームワークを大切にしており、生き生きと業務にあたる姿は家族の安心や信頼につながっている他、遠方から定期的に面会に訪れる家族にとっても楽しい帰省となっている。人吉球磨の豪雨災害以降、ホームが立つ地域に生活を移された世帯も多く、開設時とは異なる環境になり、今後は様々な近隣者の声にも耳を傾けながら地域と共存できる施設を目指していきたいとしており、これからの取組が多いに期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員で考えた理念及び達成するための5条の約束事を、日々実行できるように、朝の申し送り時に全員で唱和し、ホールの目が留まる所やトイレに掲示し常に心にとめるよう啓発を行っている。	職員の中に理念がしっかりと定着しており、その人らしい生活を送ってもらうための心得となる“5つの約束”とともにケアの指針としている。家族へは入居時に理念を通してホームの方針を伝えるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナが5類に移行してからも、施設においてクラスターが発生し、なかなか地域やご家族との交流ができていなかった。少しずつ交流の機会を増やしていきたい考えはある。	コロナ感染症の5類移行も地域交流の機会を制限せざるをえなかったようであるが、地区の清掃活動には職員が参加し、入居者に馴染みのおくち祭りには子ども神輿の訪問を受けている。中学生の職場体験は実施には至らなかったものの、運営推進会議では参加者から地域の情報が得られており、今後徐々に再開していきたいとしている。	ホームは自治会に加入し会費の支払いや回覧板のやり取りを通して、地域の一員として活動している。感染症の状況をみて入居者とともに回覧板を届ける事なども良いと思われる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所の相談や、民生委員さんからのお尋ねがあれば、随時お話しして対応している。地域との繋がりを再構築のなか少しずつ発信したり、拠点として活用していただければと考える。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議において、いただいた意見やお話は記録し、職員会議の際に口頭にて説明を行い、意見交換や支援の検討の材料とさせていただいている。	現在は対面での直接開催が出来ており、行政や包括、地域や同業者の代表、家族等が参加している。ホームからは管理者の他、推進会議の担当職員1名も同席し、入居者の現状や行事、身体拘束の研修及び事故などについて報告をしている。参加者からは事故などに対するホームの考え方や取組について質問と同時に夜間の一人態勢の難しさや大変さにも焦点をあて意見が交わされている。	会議会場が敷地内の法人事務所となっており、事前にホーム内の状況をみてもらうことでより会議内容が具体性を増している。今後も年度初めの会議などには是非ホーム内を案内されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	推進会議には、高齢者支援課や包括のスタッフの方が参加いただき、現場の声を届けたり、研修の際に問題を提起したりさせていただき検討を仰いでいる。	運営推進会議には行政担当者や包括センターの職員が参加しており、ホームの現状を発信しながら感染症や事故などについて相談事に応じてもらい適切な助言を得ている。認定調査には職員が対応し、居室での入居者の普段の姿を見てもらうこととしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員を配置し、2ヶ月に一度全員を入れて話し合いや検討会を実施。玄関は夜間のみ施錠。ホールと廊下の間仕切りのドアも日中は開いて廊下がしっかり確認できる環境にある。	身体拘束については2ヶ月に1度の勉強会を開き、ホームの共通認識として拘束を行わないケアを実践している。入浴時や更衣中のボディチェックで少しでも気になる点があれば、家族に連絡しセンサーマットなどに頼らず転倒のリスクに対応するようにしている。虐待防止についても新聞報道などから事例をもとに検討している。管理者は職員の体調を見ながら声掛けや早めの対応を行い、チェックリストで自己を振り返る機会をもっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会社や事業所にて積極的に研修を行い、常に啓発を行っている。身体拘束と共に、会議の際に意見交換を実施している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度や権利擁護についても、取締役社長が主となり研修が行われており、金銭管理等において困っておられたりのお話が家族等から聞かれた際に助言するなど制度の活用を促している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	内容を説明し、書面にて合意を得ている。質問やお困りごとなどがすぐに尋ねられるように管理者と携帯にてやり取りがいつでもできる環境整備を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年一回の担当者会議の実践や、近況を月に一回は書面にて郵送しお伝えしている。また、電話やメール等で連絡の取りやすい環境をつくり協働できるように努めている。	担当者会議や運営推進会議、電話などで家族の意見や要望を引き出し、外泊や外出、差入れの希望等が寄せられている。毎月発送する入居者の近況報告を家族が楽しみにされており、入居者の普段の様子を写真でコンスタントに伝えるようにしている。入居者の要望は日々の会話から聞き取り、買い物などへの外出や嗜好品の購入依頼があがっている。	今後感染症などの状況のみて、家族会の立ち上げなども視野に検討されることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度、職員会議を開催し意見の聞き取りを行い、管理者が参加する部長会議にて各事業所の幹部と社長にも意見を出せるようにしている。個人面談の実施もしている。	月の職員会議でケアの向上や改善点について意見を出し合い、行事担当者を中心に月の行事に向けた提案を収集している。管理者が法人会議でホームの現状を報告し、外出や緊急時に不足していた車椅子(2台)の購入につながるなど職員意見が反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	意見や希望の聞き取りを行い、就業体制の整備には努めている。出来る限りの働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画を行い、職員会議の際に同時に参加できるよう工夫し、外部研修の案内もホワイトボードに掲示し見れるようにしている。新人においては、担当者をつけ自立可能まで一緒にシフトに入る等の工夫をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域のブロック会議や研修への参加を促し、その際に意見交換や仲間作りを実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前にご家族、ご本人とお会いし状況や困りごと、心配な事などの聞き取りを行っている。ご本人の役割を見つけれるように、できる事を重点に聞き取りを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所するにあたり、何が一番不安かを伺えるように傾聴している。ご家族にとってどういった立場に利用者様がおられるのか、関係性としてどうなのかも観察しながら、お話をするように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	信頼のある病院を受診し続けたい、信仰上でこれを続けたい等のお気持ちを大事に可能な限り実施できるように、職員とご家族の双方の意見をすり合わせ実践できるように善処している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に行える作業を検討し、実践している。例えば食器洗淨からふき取りまでを隣で一緒に行いながら疲労感が募ったり負担が大きくならないように観察し、終了時に皆で感謝の言葉をお伝えしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会に来られたご家族には、面会後のご本人の表情や言葉をお伝えし次回の面会を楽しみにしていただくように配慮している。また、遠方の方にはLINEなどで動画や写真を送るなどしてお返事を待ち、利用者へ返事を伝えるなど、双方が笑顔になれる関係性を構築できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナが5類に移行したことで、面会や参加の発信ができるようになってきた。今後、以前のように家族以外の方とも交流の場を増やして行きたいと考える。	100歳を超えてなお、自身で歩いてトイレに向かわれるなど入居者のできる力を継続して引き出し、馴染みの職員による入居者との穏やかな日々が支援されている。郷土のまつり“おくんち”にはつぼん汁や赤飯で祝い、季節の行事を食で感じてもらうよう手作り料理を提供している。家族からの本や新聞の差し入れや自宅への帰省など家族との交流が徐々に再開されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	集団生活であり、個々の状況が様々であることから、職員が間に入り良好な関係性で過ごせるように配慮している。それぞれへの、声掛けやお礼の言葉を心がけ助け助けられている事の意識がもてるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現況はどうか等の、メールやお手紙を送り、職員からの話や出てきた写真を一緒に送付するなどして、関係性が続いていけるように工夫している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の中での、本人の言葉や行動に傾聴と目配りを行い、その場で解決できることは職員と話をして解決する。検討を必要とする事は、話し合いの場を設け早急に解決できるように努めている。	職員は入居者の普段の言動から思いをくみ取り、支援に反映するようにしている。自ら行きたい場所や食べたいものを口にされるようであるが、ベッドでの生活が中心になられても入室時や時間を見て必ず声掛けをし、入居者に寄り添うように心がけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントを行った際の情報の共有や、入所後に新たに得た情報の共有を図れるように、書面や会話、情報交換や申し送りなどで把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りや行動観察等で、生活リズムを把握し、意見や疑問、改善の必要性など随時報告し合い、本人を(個人を)知るように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者会議を開催し、計画案について話し合いを実施。モニタリングや家族の意見等を反映できるようにし、日々の変化にも対応できるよう柔軟性をもつようにしている。	入居直後の担当者会議は本人、家族、ケアマネジャーや調理専任者等が参加し、入居者のこれまでの生活状況やホームに求められる事柄を家族に尋ねるようにしている。ホームでの生活ぶりから興味のある事を引き出し、一緒に行動することで安心して過ごしてもらおう事などを長期目標とし、3か月後に担当者会議に関わった家族や職員から意見を聞き、評価した後アセスメントから新たなプランを立案するようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は、他者がみても分かるように記載を徹底。重要な記載や継続観察を必要とする事は、赤字にて解るように示している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	福祉用具の検討や、動線の検討など随時行い、自費購入の依頼や相談を実施している。状況の変化を多面で見れるように観察している。提携医院のドクターにも相談している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	散髪を訪問して施行していただいたり、消防訓練時には、消防署員の方にもきていただいている。往診も提携医院に依頼しており、安心して生活できるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	出来る限りの、かかりつけ医を受診できる体制の整備に努めている。内科・心療内科・精神科・外科・歯科など家族やご本人の関係性が築かれている医院を継続されるよう勧めている。	現在、協力医療機関による訪問診療や受診外出を支援する他、もともとのかかりつけ医へホームや家族による受診支援が行われている。専門医の受診もホームで対応している。職員は毎月の体重測定や毎朝のバイタルチェック(異常があれば午後や随時)などにより健康管理に努め、必要に応じて受診に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタルの測定・体重測定・排便のチェック・排尿回数・食事の量や回数・水分量などを毎日記載し、看護や医師に情報をすぐに渡せるように努めている。状態の変化は、随時電話にて連絡し受診や往診依頼に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時に、情報を病院側に渡し利用者が困らないように努めている。また、入院中も、相談員や看護師に電話を入れ長期化されるような場合はご家族も入れての話し合いの場を設けていただくようにしている。退院時は、情報をいただく。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化の兆しが確認できた場合は、医師に確認し家族への説明を早い段階で行えるようにしている。提携医院へ家族と共に向向き、今後の話を一緒に聞いて事前指定書の内容を再度確認している。医療行為を希望の場合は病院への段取り協力も行えるようにしている。	入居時にホームの指針をもとに説明を行い、事前指定書で意向などを聞き取っている。その時点ではよく分からないという家族もおられ、必要に応じて話し合いながら、医師が看取り期と判断した時点で、再度確認を行っている。重度化・終末期に関する研修会も開催されており、この2年間でお二人の最終を支援している。コロナ禍ではあったが、部屋の外からの面会など、可能な限り顔を見てもらったことで、家族からは「最期に一緒におれて良かった！」と感謝を伝えられている。	看取りを支援する中で、特に聴力は最後まで残されていることを大切に支援が行われている。今後も日頃の関わりを大切しながら入居者・家族の思いに添えていかれることが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署員による救急対応についての研修や応急処置の外部研修に参加している。急変や事故発生時の連絡は全体LINEを使用して、情報を交わしたり、招集したりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自主訓練や消防署を入れた訓練を実施し、消火設備の点検も定期実施している。また、避難時の想定訓練も実施。非常食の備蓄や持出し袋の確認も実施している。BCPの策定も委員を中心に内容をつめている。	今年度は6月に自主訓練を12月に消防署の協力を得て、風呂場からの発火を想定した避難・消火訓練を実施している。12月の訓練後に、入居者の避難誘導について発火場所の近くの人から誘導することや、戸を閉めての避難などについてアドバイスを受けている。日頃の安全チェックは居室は早番、外回りは遅番が担当している。災害備蓄として災害用、感染対策用をリストをもとに事務所で管理している。	BCPの策定については委員を中心に進められており、完成後は職員間で共有を図られることが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しき中にも礼儀ありの精神を忘れないように、日々努めている。共同スペースでも、尊厳が害されないように配慮している。肯定から支援にあたる事に努めている。	入居者への対応は馴れ合いにならないようにすることやノック、了承を得ての入室など尊厳やプライバシーへの配慮については会議などで共有を図っている。呼称は苗字や下の名前での対応を、入居後の本人の反応を見ながら決定している。入浴支援など同性介助への希望にも応じている。身だしなみやおしゃれの支援として、定期的な訪問カットの利用や衣替え、衣服の購入は家族の協力を得て支援されている。広報誌など写真掲載については家族の了承を得ており、職員の守秘義務の徹底については会議、研修などで周知徹底が図られている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	行動には、意味があるとの捉えを忘れず、寄り添う姿勢で支援にあたる。「どうしました？」との問だけではなく、「トイレ？」「ご飯？」「お風呂？」など具体的な言葉を示して本人の意思を確認できるように工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な生活の時間は設定しているが、利用者の意思を尊重し、柔軟に対応できるように努めている。行為の促しや声掛けは行方が強制はしない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の着替え、就寝時の着替え等を施行の際も、利用者のお好きな衣類を選択するように努めている。また、整容や汚染時の交換はスムーズにできるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	購入したり、いただいたりした食材をみてもらい季節を味わい、何にしたら美味くなるかなどの質問をしたりしている。一緒におやつ作りなども楽しんでいる。	専任者を中心に献立作成や調理が行われている。「噛んで軟らかく、匂を、手作り食」の提供をモットーにしたホームの食事は、毎食汁物を添えのど越しも良く、盛り付けにもこだわり入居者の楽しみや家族の安心・信頼にもつながっている。月に4回程(調理担当者の休み)配食サービスを利用しているが、ご飯と汁物はホームで作っている。職員は持参した弁当などを摂っているが、検食者を設けており、気付きや入居者の感想などを今後活かしている。	工夫されたホームの食事は聞き取りや記録写真などからも窺うことが出来た。献立作成や食材購入から調理と職員の努力が入居者の楽しみに繋がっており、変わらぬ取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や間食、水分のチェックを毎日行いながら、摂取状況や咀嚼状況を観察して、食事の形体の検討を行っている。量的に厳しくなったりする場合は補食をしたり、食べたい物に変えたりと柔軟に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを行い、口腔内の状況の観察も行うようにしている。提携歯科に相談したり、かかりつけの歯科受診をお願いしたりして、食べることがいつまでも可能なように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	布パンツ使用の方が2名、リハビリパンツの方が4名、オムツの方が3名(車椅子)である。歩いたり、立位が可能な方については可能な限りトイレにて排泄をしていただいている。夜間もポータブルを設置して排泄し易い環境整備を実施。	個々の身体状況に応じ、リハビリパンツや布パンツ、オムツの使用を支援している。歩行や立位ができる方は可能な限りトイレでの排泄を支援しており、日中は3か所の使い慣れたトイレを使用されている。夜間のみポータブルトイレを使用される方もおられ、トイレ同様清潔に管理している。便秘の予防として、適切な水分補給と野菜や果物の摂取を調理担当者と連携を図りながら取り入れている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量のチェックと、確保を行っている。間隔が長い方については、予防的にカマグを定期内服していただいたり、オリゴ糖にて甘味を付けて水分や果物を積極的に摂取できるように努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	体力や年齢的なところを考慮し、現在週2回を基本に入浴をしていただいている。汚染や、本人の希望があればいつでも入れるように調整している。順番などは希望に添えるように努めている。	週2回の入浴を基本としているが、回数や順番は要望に応じて対応しており、毎日入られる方、一番風呂を好む方もおられるようである。また、拒否があり間隔が空く方もおられるが、無理強いせず着替えなどで清潔保持に努めている。汚染時はシャワーなどでその都度対応し不快なく過ごしてもらえるようにしている。菖蒲や柚子湯は継続して取り組んでおり、12月の冬至には柚子湯週間として前もってポスターを掲示し入居者の気分をあげたり、冬至前後1週間柚子湯を提供するなどホームの工夫が聞き取りや書類からも確認された。	ホームならではの季節湯への工夫は入居者にとって何よりの時間になったと思われる。今後も入浴が清潔保持の支援に加え、楽しみなものとなるよう継続した取組に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の安眠を妨げない程度の昼食後の昼寝の時間を設けている。ホールに設置しているソファにも休めるようにしている。ご本人のペースに合わせて支援している。		
47		○服薬支援			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人のカルテに、内服薬の説明書を綴じていつでも見れるようにしている。また、頓服や臨時薬などは薬ロッカーに貼り付け、忘れないように工夫している。症状に変化があった場合は医師に情報を送り変更していただくなどの支援にも努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌が好きな方には、iPadやテレビのユウチューブなどで音楽を流し一緒に歌ったり、お茶屋さんに務めていた方にはお茶を入れていただき、専業主婦だった方にはお茶碗洗いや洗濯物量みなどをお願いしたり、晩酌していた方には夕飯に少しお酒を付けたりと工夫している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ5類移行になり、やっと外出が可能になりご家族とご自宅に出かけたり、一緒に食事を取られてきたりができるように、これから少しずつ外への働き掛けを行っていく。ドライブは季節を感じれるように工夫している。	コロナ5類移行後少しずつ自宅への帰省など家族の協力を得た外出が行われている。ホームの庭先からは眺めも良く、コロナ禍も散歩をしたり、テラスでお茶を楽しむ機会は継続されている。今後は状況をみながら季節に応じたドライブなどを進めていきたいとしている。	感染症の時期や身体状況から車での外出が難しい方にとっても、庭先でのお茶や散歩などホームの恵まれた環境を生かした外気浴の機会を継続されることが期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人のお金に関しては、預り金という形にて保管し日用品の必要な物の購入及び受診や薬代にあて、明細と出納帳を月ごとに家族にお渡ししている。残念ながら、個人保管の金銭は現在ない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	テレビ電話や、電話を利用してお話をされるお手伝いは行っている。字をかける方には、写真とともにハガキを出したり、年賀状を出したりの支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム全体の清掃を時間を分けて毎日実施し、清潔保持に努めている。また加湿や除湿、空気清浄機を設置して快適に過ごせるように工夫している。席の配置も検討して変更したり、壁にも季節ごとに違う飾りにて楽しんでいただけるように努めている。カレンダーも大きなものに。	コロナ対応に限らず開設時からホーム内の換気、清掃の徹底に取り組んでおり、経年にあっても職員の環境への取組が窺える。季節ごとの壁面制作は入居者も一緒に取り組んでおり、1月はすずらん神社を作り、入居者の描いた絵馬を飾り新年を祝っている。日中の殆どを過ごすリビングは陽当たりも良く、室温も入居者に聞きながら調整されている。気の合った方同士の談笑や、ゆつくり足を伸ばし、得意の童謡などを口ずさむ方などホームの穏やかな日常が見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	個々の性格や会話の状態などを考慮して、席の配置をしている。固定席と自由に座れるソファ席を設けて職員が柔軟に誘導介助したりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅にて使用していたタンスや布団などを、お部屋に持参いただき見慣れた空間作りを目指している。また、テレビを個人で見たい方には持参のテレビを設置し、プライバシー保護のため扉に目隠しのカーテンを設置している。	契約時に居室への持ち込み品について説明を行なっている。家族へは一度に揃えてもらわず関心を持ってもらうようにしており、季節ごとに不足の品などがあれば伝えている。どの部屋からも庭が眺められ、掃き出し窓で開放感があり、使い勝手の良い広さである。テレビを持ち込まれている方はニュースや時代劇などをよく見られているようである。家族の中には定期的に訪問し、本人の好む本を持参されており、3冊を常時部屋に残し、これまで読まれた本は自宅で保管されている。	どの部屋も家族の思いや職員の工夫が窺える。コロナ禍で玄関からの訪室が出来ない時も、窓側から様子を見られることは家族の安心につながっている。今後も家族の協力を得ながら個々に応じた居室環境に努めていかれる事が期待される。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレには、貼り紙にてわかるようにし、職員が利用者の移動の際に口頭にて示したり一緒に移動したりしている。お部屋もわかるように名前を付けている。手すりの設置及び移動に必要な福祉用具の検討を随時実施している。		